アフリカの今

県人支援の現場から

ザンビア編 ⑦

できることから実行

カイゼン大会

日本語の「改善」は、「カイゼン」として世界共通語になっている。元々は製造業で従業員が行う生産性向上の取り組みを指した言葉。今では教育や福祉など幅広い分野で使われている。

ザンビアの首都ルサカに2月中旬、吉野川市山川町のNPO法人TICOが農村部のモンボシ地区で組織した「安全なお産支援グループ（SMAG）」のメンバーがいた。ザンビア政府の開発局が開いた「カイゼン活動全国事例発表大会」で、妊娠にまつわる知識の啓発に取り組むSMAGの「カイゼン」活動を発表するためだった。

「グループの活性化にもつながる」と大会への参加を目指し、2012年12月に主催者の審査に合格。主催者には、農村部の取り組みを紹介してもらうことで、カイゼン活動を全国に普及させたいという狙いもあった。

しかし、電気も水道もないモンボシの人たちは普段、公の場で話す機会はない。首都に集まった大勢の参加者の前で、うまく発表できるのかどうか。SMAGの代表メンバー6人は農作業の合間を縫って、TICOザンビア事務所の田村幸根さん(29)＝三重県桑名市出身＝と苦労しながら準備を進めた。

大会当日、応援団も含めてモンボシからは14人が参加予定だったが、大雨による川の増水で2人が集合場所の診療所までたどり着けなかった。自宅から診療所まで歩いて4時間かかるため、前日から泊まり込んでいたメンバーもいた。

ミニバスに乗り込み、増水した川を横断しながらルサカへ向かう。会場の国際会議センターは想像以上に立派な建物だった。しかもスーツ姿の関係者で埋め尽くされている。メンバーたちに緊張が走った。

村での宿泊でお世話になったアルフレッド・ムエンバさん(49)の顔もあった。いつもの作業着とは違う、ジャケット姿がどこか初々しい。

TICOが開設した出産施設で奮闘する看護師のアイビー・チヨタ・ムクンバさん(47)も応援に駆け付けた。「自分の力を出し切ればいい。何も恐れることはないよ」。さすがに彼女は度胸がある。

午後2時すぎ、いよいよSMAGの順番だ。プレゼンターのフランシス・マディラさん(40)とキャサリン・ミヤンダさん(48)が壇上に立つ。月例会議の出席率を向上させ、遅刻率を低下させるための改善策を発表した。

使い慣れない英語に客席からは失笑が漏れる。「パワーポイント」もうまくは使いこなせない。それでも、懸命にひたむきに発表を続けた。次第に会場の雰囲気が、温かいものに変わっていく。

全ての報告が終わった。一瞬の静寂の後、割れんばかりの拍手が湧き起こった。近代化からほど遠い村の「カイゼン」活動の報告は、会場を埋めた関係者の心に何がしかの感慨をもたらしたのかもしれない。

客席の一角に陣取って声援を送ったモンボシの人たちを見た。ムエンバさんもムクンバさんも笑っている。田村さんと同僚の瀬戸口千佳さん(29)＝神戸市出身＝は何度もうなずき、目を細めている。

終了後、参加者たちは語った。「最初から何もできないと思うんじゃなく、自分たちができることを探して取り組む大切さが分かった。本当に参加できてよかった」

早めに帰ろうと会場を出た彼らだったが、モンボシから来る途中、川に潰かったミニバスは動かなかった。夜になり、やむなくTICOの四輪駆動車にすし詰めになって帰路に就いた。

翌日からも農村部での貧しい暮らしは続く。しかし、胸に抱いた大きな達成感は、グループの支えとなっていくだろう。

（藤長英之）

＝この項おわり

SMAGのカイゼン活動事例を発表するマディラさん㊨とミヤンダさん＝ザンビアのルサカ